

書評

Panchanan Saha

SHAPURJI SAKLATVALA-A Short  
Biography, Delhi, 1970. Pp XII+104

上野 格

一、サクラトワラーとの出会い

S・サクラトワラーという注目すべきインド人の共産主義者、イギリス下院議員について始めて教えられたのは一九六六年のはじめの頃だった。本書の著者シャハ博士は当時カルカッタ大学の講師で、ロンドン大学パークベック・カレッジのホプスボウム博士のゼミナールで、十九世紀のインド人労働者の国外流出（世界各地の砂糖キビ栽培地への移民）を研究していた。このゼミナールに参加していたアジア人がシャハ氏と私の二人だけだったことも手伝って、何かと双方の国の事情などを語りあう機会が多くなっていたが、そのうち何かの折に聞いたのが、このサクラトワラーのことだった。全く始めて聞く名前であり、インド人でいてイギリスの国会

議員であり、インド有数の財閥の一員でありながらイギリス共産党の初期からのメンバーであるという説明に、聞けば聞くほど混乱し、われながらこれ程英語が下手であったかと、文字通り耳をうたぐったものであった。混乱が一応おさまり、おぼろげながらサクラトワラーの劇的な生涯と活動がわかってみると、詳しくそれを伝える書物を知りたくなるのは、一種の職業病でもあろうか。しかし、彼は、伝記はまだ一冊もない、と怒ったように言い切った。パーム・ダットの紹介状をもって近く東独に行き、クチンスキーを訪ねて、資料を一部補い、近年中に、短くともとにかく伝記を作る予定だ、というのが彼の答だった。

それから数年後、彼は、約束通りサクラトワラーの小伝を書きあげ、インド人労働者の移民に関する研究と共に送ってくれた。どこをどう回ったものか、かなりの日数をへて屈いたこの小伝の描くサクラトワラーの姿に、筆者は、最初ロンドンで聞いた時にまさる深い感銘をうけた。筆者の守備範囲を大きくこえる本書を敢えて書評で取上げたのは、わが国の社会主義思想史研究、運動史研究の対象にサクラトワラーを加えられて然るべきだと考えたからにはかならない。

(1) Panchanan Saha, *Emigration of Indian Labour* (1884-1900), Foreworded by E. J. Hobsbawm, Delhi, 1970.

二、生涯

書評

本書は、一八七四年から一九三六年までの生涯を描いたものであるが、中でも一九二七年一月十四日から同年四月八日までの約三ヶ月にわたるサクラトワラーのインド訪問に重点をおいた叙述がなされている。これに、サクラトワラーの同志バーム・ダット R. Palme Dutt の序文と、付録として、サクラトワラーとガンジーの公開書簡四通、一九二七年訪印の際の各地の歓迎の辞、一九二七年十二月の国民会議派マドラス定期大会にあてたメッセージ、一九三〇年十二月発表のインド円卓會議論評、サクラトワラーの死をいたむ各方面からの追悼文が収録されている。

サクラトワラーは一八七四年三月二十八日、ボンベイに生まれた。母は、インド第一の財閥タター家の創設者 J・N・タターの妹であり、父方は、一八三〇年代に移住してきた熱心な拝火教徒であった。

この「銀のさじをくわえて生れてきた」利発な少年は、長ずるに及んで、次第にインド国民の解放の道を探しはじめた。最初に彼の求めた救いの道は宗教であった。インド国民に自覚を促し前進を約束するものとして、宗教に彼は大きな期待を寄せるが、間もなく、それは何の解決にもならず、現存社会秩序を受け入れその犠牲になることを教えるにすぎぬことを知るようになる。しかし、サクラトワラー自身の生活は、一面で、生涯にわたって非常に宗教的な厳しさを持ったものであったし、後年、共産黨員になってからも自身の子供

たちの養育にあたっては、拝火教徒の宗教的戒律に従っていた。当然共産党側からは批判がなされたが、彼は、批判の正当性を認めつつも、「これは、家庭内の問題である」として遂に、最後まで、批判を拒み通したという。

彼の求めた第二の道は、自然科学による救いであった。ボンベイの聖ハビア・カレッジを卒業するまで、彼は自然科学に熱中し、特に地質学および鉱物学に長じていた。また、一八九〇年代にボンベイに悪疫が大流行した際は、ロシアの著名な医師ハフキン Haffkine を手伝って、救済事業に没頭した。スラム街での救済・厚生活動も、この頃の彼の主な活動分野であった。しかし、救済活動の限界にもやがて気付くようになり、また、自然科学も、それが一國の経済の中で実際に応用されなければ何らの解決をももたらさぬことに気付くにいたって、彼は更に別の活動に身を投ずるようになる。

彼の求めた第三の道は、インドの工業化を促進し、それによって現存するインド後進性を払い捨て、国民的前進と貧困の克服をかちとろうとするものであった。彼は、伯父、J・N・タターに導かれて、インド国内を広く探険し、鉄鉱石を求めた。彼らの三年にわたる調査によって集められた資料がタター財閥の事業全般にわたる大きな成功のもととなったのであるが、その直接で最大の業績はタター鉄鋼会社の創立であって、これは、彼の発見した鉄鉱石の大鉱脈、石灰石および石灰石によって可能となったものであった。

當時は、インド国内に民族的自覚がたかまりつつある時期であった。インド国民会議（派）は既に一八八五年に樹立されていたが、これはまだイギリスに幻想をいだいており、インド再建にイギリスの善意を期待している程度であったが、サクラトワラーは早くも民族独立の問題を政治的課題の中心にすえ、イギリス治安当局とも問題をおこすようになっていた。サクラトワラーの求めた道は、こうして、宗教、自然科学、産業振興をへて、政治に到達したのであった。

しかし、これは、タターのような新興企業体にとっては非常に迷惑な活動であった。タター財閥自身もインドの開発と向上には非常な力をそそいでおり、繊維、鉄鋼、電力、自動車、化学から食品や保険にいたるまで殆んどすべての産業分野に活動の手をひろげ、各部門での幹部教育を徹底して行ない、無数の事業家、政治家を輩出してきているのであり、また、その中核ともいへべき Tata Sons Private Limited の資本の85%は、現在では、一族の寄附した諸慈善団体の所有になっているのであるが、鉄鋼会社創立（一九〇七年）直前の時期に、事業の中枢をになう身内の幹部がイギリス当局とトラブルをおこすほどの民族解放主義者になり、活動するのは、非常に具合の悪いことであった。こうして彼はイギリスに役員として転出させられる。一九〇五年のことであった。この年にベンガル地方はインドから分離され、そこにスワデン運動がわきおこり、ベンガルの戦闘的ナショナリズム

の急成長をおそれて、イギリス当局は弾圧を強化していったのであった。

サクラトワラーの生涯は、イギリスへの転出で、その前半生の第一段階をおえ、第二段階に入ったといえよう。第一段階がインド人民の解放の道を求める旅とすれば、第二段階は、政治を道としてえらびだした彼が、社会主義をインドの道として確信し、政治運動の組織として共産党をえらぶにいたる過程である。

イギリスに着任して数ヶ月間、彼はマンチェスターで働くが、間もなく、ロンドンにもどり、ここでナショナル・リベラル・クラブの終身会員になる。これは彼の政治歴の第一歩であるが、必ずしも彼自身の意志によるものではなく、タター一族の膳立てによるものようである。入会によつて、イギリスの良識と善意を代表するリベラル派と交われば、彼の政治的信条も隠健なものにならう、という期待を一族のものもったのであろう。

このクラブで、しかし、彼は、かの悪名高きモルリー・ミント改革の当時者モルリー卿に会う。一九〇九年のこの改革は、ヒンズー教徒と回教徒の分離選挙を導入することで、インド・ナショナリズムに決定的な分裂の種を播いたものであり、さきのベンガル分離とともに、今日のインド・パキスタンの悲劇の直接の因をなすものである。もちろん、サクラトワラーのとうてい承服しかねるものである。彼はモルリー

卿と激烈な論戦——パーム・ダットによれば「決闘」——を行なった後、このクラブを脱退する。代って彼のえらんだ政治組織は独立労働党（ILP）であつて、一九一〇年にこれに加盟した。パーム・ダットと知合つたのはこの頃、同じILPメンバーとしてであつた。

だが、遍歴の旅はまだ続く。ILPはたしかに当時のイギリス労働者階級の運動をリードしていた。しかし、その資本主義批判は不徹底であり、しかも決定的なマイナスとして、イギリス以外の労働運動との国際的連帯が運動の中に入つてこなかつた。サクラトワラーの求めるものは、インド民衆をイギリス帝国主義のくびきから解放する道であり、抑圧されている人間を資本主義的取奪から救う方策であつた。彼がILPにあきたりなかつたのは当然といえよう。

このような時期に、新しい光が北方から射してきた。一九一七年のロシア革命である。サクラトワラーはこれを雙手をあげて歓迎する。国際干渉戦と報導機関の反ソ・キャンペインに対抗して、彼は親ソ的な情報宣伝活動をはじめ、一九一八年、人民ロシア情報部（People's Russian Information Bureau）に加入して、運動を一層積極的に展開した。

第一次大戦終了後間もなく、第二インター再建の動きがおこり、ILP右派もこれに同調する動きを示したが、サクラトワラー、パーム・ダットらILP左派はこれを阻止し、やがて、第三インター（一九一九年）にILPを加盟させる

べく運動をおこした。一九二〇年秋のILP年次大会では、

機関誌インターナショナルを発刊するILP左派——サクラトワラー、パーム・ダット、ウォルトン（Walton）、ニューボルド（Newbold）、エミール・バーンズ（Emile Burns）

ら——は、第三インター加盟促進の運動を展開するが、マクドナルドの「中道主義」に敗れ、ILPは第二第三両インターの「中央」をゆく第二半インターに加わり、その首頭となる。（もちろん、予定通りのコースをたどつて、第二半インターは二年後に第二インターに合流するのではあるが）。

敗れたILP左派は一九二一年一月、共産党統一会議Unity Congress of the Communist Partyに参加し、こうして、サクラトワラーは、長い遍歴の後、ようやく、インド民衆の解放の道を探しあてたのである。イギリス共産党は一九二〇年に創設されているが、サクラトワラーはその当初から接触を保つていた。従つて、現在では、創立当初からのメンバーに数えられている。

共産主義を旗印しにかかげた彼の後半生は、二期六年間にわたる下院議員としての活動、一九二六年の大ストライキでの煽動活動、一九二七年の訪印などを中心として、イギリス労働者階級に対する激しい宣伝、煽動活動と国際連帯、植民地主義批判の活動などで知られている。前半生に比べれば、後半生はかなり公的な活動が多いため、クルーグマン「イギリス共産党史」などにも若干の記述が見られるが、やは

り問題とするには足りぬ程度でしかない。

彼が最初に立候補したのは一九二二年の総選挙であり、選挙区はロンドンの北バタシー、一人区である。地区労の推薦で、既に共産党員であった彼は、I L Pの候補者として出馬し、一一、三一一票、五〇・五％の得票で当選、イギリス最初の共産党国会議員となる。インド人のイギリス国会議員としては史上三人目であるが、さきの二人は、自由党および保守党であったから、インド人労働者大衆を代表するものとしては最初の議員であった。翌一九二三年に再び選挙があり、彼はやはりI L Pから立候補するが、一二、三四一票と得票をふやしながらい、四九・六％という得票率で落選する。一九二四年にまた総選挙があり、この度は共産党から立候補し、一五、〇九六票と得票をのばし、五〇・九％の得票率で当選する。このあと、一九二九年まで彼は議席にあるが、同年五月の選挙では労働党からの攻撃が激しく、六、五五四票、一八・六％の得票率で落選、翌三〇年、グラスゴウの補欠選挙に出るが、一、四五九票、五・八％と振わず落選、供託金を没収される。翌三一年の総選挙にも、北バタシーで立候補するが、やはり三、〇二一票、九％で落選、そして供託金没収という結果におわる。以後彼は立候補をとりやめている。

一九二二、二三年における彼の立候補は、選挙区にかなりの混乱をひきおこし、特に保守派の人種的偏見を刺戟したらしい。パーム・ダットはその一端を示す次のようなエピソードを伝えている。

パーム・ダットは、インド人を父とし、スエーデン人で典型的な北欧系美人を母として生れた。両親は、当時北バタシーに住んでおり、勿論、立候補者サクラトワラーとは親交を結んでいた。その母のもとへ、保守党の候補者が戸別訪問に来て、「もちろん、あなたは黒んぼになど投票したくないでしょうね」と念をおしたというのである。トリーリーの体質は今も変っていない、とパーム・ダットはその人種差別ぶりを軽蔑している。

議会でのサクラトワラーの活動は、労働運動擁護は当然のことながら、それに加えて、帝国主義および植民地主義に反対する被支配国人民の民族解放運動の支援、イギリス当局の解放運動弾圧に対する抗議を主な内容とするものであった。インド独立問題に関しては勿論、更に、一九二六年のイギリスの中国侵略、さらには長い抗争の歴史をもつアイルランド問題についても、彼は度々議会で発言し、民族自決の原則を主張してやまなかった。

議会外での彼の活動も目覚ましいものがあつた。特に一九二六年の大ストライキに際しては、既に国会議員の身分でありながら、ハイド・パークでの演説が煽動的であつたとの理由で二ヶ月間投獄された。サンデー・タイムズ紙が数年前に、一九二六年ゼネストの四十周年記念特集を出したときにも、当時の代表的活動家としてサクラトワラーの名があげられ

ていた程であるから、その役割は非常に大きなものがあつたのであろう。

一九二五年、彼は国會議員国際会議のメンバーとして渡米することになったが、遂にアメリカのビザが得られず渡航不能となった。理由は、「アメリカ合衆国は革命家を受入れない」、というものであつた。これを皮切に、彼は各国から入国を拒否されるようになる。

同じ一九二五年、彼はタターの役員を辞任する。それまで彼は資本金四百万ポンドのタターの系列企業の部門マネジャーをしており、この企業の重役の一人は彼の弟であつた。これ以後彼はその全生活を運動に投じ、落選後は、かなりの貧しい生活に耐えてゆかねばならなかつた。

一九二七年一月に、彼は、インドを訪問し、ヨーロッパの組織的労働運動とインドの民族解放運動を結合し、帝国主義と資本主義に対する共同闘争の組織化を促進すべく宣伝活動を行なう。この訪印もはじめはビザがおりず、再三の抗議でようやく許可がおりるといふ始末であつたし、四月に帰英するや否や、インド再入国は禁止され、これは、労働党政府になつても変更されることはなかつた。サクラトワラーのインド訪問は、ボンベイ、グジャラート、カルカッタ、マドラス、カラチなど各地で非常な歓迎をうけた。彼は、ヒンズー教徒と回教徒の共闘をとき、インド解放運動と国際的な労働運動との連帯をとき、イギリスの中国侵犯を非難し、また、イ

ンド議會での社会主義者の活動の必要をといいた。また、ガンジーの非暴力主義を公然と批判し、「人類を貧富二階級に分裂させている体制を打破れ」と説き、ガンジーの科学否定、手紡ぎ運動を批判して「科学の発達をインド民衆の生活向上に役立てることを何故考えないのか」と述べた。こうしたガンジー批判は、各地での演説でも語られたが、また *Amrita Bazar Patrika* 紙にも、一九二七年三月十二日号に公開書簡として掲載され、同紙の三月十八日号にはガンジーの返信が掲載された。この両書簡には、このほか、ガンジーの対英協力——南ア戦争、第一次大戦に際してガンジーが行なつたイギリス軍へのインド人志願兵募集運動（衛生兵）——の批判、ハリジャン（不可触賤民）に対するガンジーの態度の批判など興味ある論点が多いが、これらは別の機会にゆずる。

こうして僅か三ヶ月ではあつたが、各地で熱狂的な歓迎をうけて帰英したサクラトワラーを待っていたのは、「サクラトワラーはインドでガンジーを批判したため、訪印の目的を遂げられず失敗した」という新聞の論評であつた。本書の著者は、サクラトワラーの訪印がいかに成功であつたかを、当時のインド各地の新聞などから立証して、英紙の播いた誤報を訂正することに非常な力を注いでいるが、同時にまた、サクラトワラーの訪印が成功であつた何よりの証拠として、インド再入国禁止、アメリカ、エジプト、ベルギーなどの入国拒否がこの訪印直後にまたおこつたことをあげている。

国会議員を退いてからの彼の活動は、各地の労働組織への宣伝活動と、インド解放運動のロンドンでの組織化、インド人学生たちの指導などが主なものであった。訪ソ、訪独などが、彼の限られた国際交流であった。こうして一九三六年一月十六日、ロンドンで彼は亡った。六十一才。死因は心臓発作であった。死の二時間前まで、彼は、ロンドンの二つのインド解放組織の代表に、統一を説いていた。彼の最後の言葉は次のようであったという。

Unity, unity alone can give our Indian people its freedom.

(1) 得票数その他はイギリス国会議員選挙結果の統計による。

### 三、本書の意義

本書は、何よりもまず、サクラトワラーに関する最初の研究書であることに、非常に大きな意義がある。小冊子ではあるが、その生涯を適確に描いて、その人物像を浮びあがらせている。残念なことに、その説くところが若干教条的であり、思想のひだを描きわたることが少いため、サクラトワラー自身の内側を十分伺い知ることが出来ないが、これは一つには、彼の書き残したものが少いたためでもあろう。いずれ、新たな資料の発見によって、伝記にふくらみが出るものと期待している。また、インド国民を対象とする書物であるため、私の如き門外漢には、理解の及ばぬインド史上の「常識」

が多く前提されている。さきの生涯素描ではその点を幾分か補ってみたが、なお補うべき事項が非常に多くある。インド史に暗いことを痛感させられ、研究の姿勢に強い反省を促されたという点でも、本書は、筆者にとつて、感銘の深いものであった。

だが、本書の著者のイギリス社会主義史に関する理解は、やはり、教条的にすぎるものではないか、と思われる。例えば、ILPの対インド政策、植民地問題に対する姿勢は、著者の描くところよりは、はるかに積極的ではなかったか。第二インターの態度とILPの態度とにえらぶところが無いかの如き叙述は、必ずしも読者を承服させるものではないからう。また、サクラトワラーの生涯は、ナンヨナリズムと社会主義の問題に対する一つの生きた解答であるが、この問題を、思想的に扱うという問題関心は、著者にはなかったようである。サクラトワラー、ロイ、パーム・ダットらの研究はこの観点から新しく始めらるべきであらう。

わが国では、また、サクラトワラーを正面から取上げた研究は出されていないようである。最近の論文では、松元幸子「コミンテルンとインド共産党の成立」労働運動史研究五二号（昭和四五年七月）、同「インド共産党」歴史評論二五六号（一九七一、一一）に彼の名前の見えるのが、筆者の知る限り、殆んど唯一の例のようである。ただ、ここでは、一九一九年頃の亡命したインド活動家の中に「ロンドンのサク

「ラトバーラー」もあげられており、彼らは「主としてテロ活動に従事し、それに失敗して国外に亡命するというケース」と理解されている。これは二論文に共通する見解であるが、あまり正確とは云いかねるようである。また、同氏は、一九二五年十二月にインドではカンプールに共産主義者大会の開催が予定され、議長にサクラトバーラーが要請されたが、イギリス共産党が彼に許可を与えなかった、と記している。この問題については本書の著者も、クルーグマンも何も書いていないため、筆者には判断のしようがないが（但し、同大会にサクラトバーラーは個人で挨拶状を送ったと著者は記している）、これに限らず、解明さるべき諸事情が多くこの時期にはあることを、右の例は示しているといえよう。

ガンジーとサクラトバーラーの論争に触れているガンジー伝は、ルイス・フィッシャーのものだけのようである。フィッシャーによれば、一九二七年に「シャープリー||サクラトバーラーがガンジーに誤った道を捨て去り、共産主義者になるよう呼びかけた<sup>(1)</sup>」とある。これも大層大まかな説明であって、フィッシャー自身は、さきの公開書簡を典拠にあげているのであるから、論点をもう少し詳しく知っている筈であるのに、どうも舌足らずの度がすぎているようである。訳文だけで見る限り、名前も不正確である。

以上のほかには、筆者は、サクラトバーラーに言及した邦文文献を探し出せなかった。ネルー、ガンジーの伝記はもと

より、スバス・チャンドラ・ボースらの伝記的研究にも名は出てこない。しかし、例えばサクラトバーラーは「父ネルーをイギリス議会で呼んでインドの実状を説明させる」という提案を議題として提出しており、ネルーたちが、国民会議派の方針に民族独立の路線を打出した一九二七年十二月のマドラス会議には、メッセージを送っているのであって、運動の中での接触も少からずあった筈なのである。S・ボース、ネルーたちはそれぞれアントワープ、オースリアから、サクラトバーラーの死をいたむ電報を寄せており、インド議会社会党も弔電を寄せていたのであって、何故に、現在のインド関係文献の中に彼の名が見出せぬのか、理解に苦しむのである。一つの鍵は、彼の訪印の際、ボンベイ市議会でサクラトバーラー歓迎決議案が否決されたときの理由「サクラトバーラーはインドには何の役にも立っていない」、「サクラトバーラーの拠って立つ原則は明確でなく、明確なのは革命的なものだけである」ということに見出せるかもしれない。

インド文部省編纂のインド解放運動犠牲者名鑑にも名を見出すことの出来ないこの社会主義者の生涯を始めて明らかにした若い著者に、私は心からの賞賛をおくりたい。

(1) ルイス・フィッシャー、古賀訳『ガンジー』紀伊國屋書店一九六八年、三三九―三四〇頁。